

第28回『教行信証』に学ぶ会 講師：延塚知道先生 【ライブ版】

2024(令和6)年6月6日(木) 会場 円徳寺

講題：『教行信証』 信巻 三心釈のまとめ 善導の彰隠密

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の
ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わ
くは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

え、どうもこんにちは。しばらくですが、まあ今年に入りましてから随分忙しくしておりますて、だいぶんちょっとからだをやっぱり痛めましたね。歳がいつとるせいか途中で熱が出て倒れたり、あるいは帯状疱疹が出たり、はい、まあ弱つとる証拠ですね。まあしかしどっかで倒れて死んだら丁度いいわと思って、(笑) 思ってますけど、まあまあみなさんお元気そうで、ええ何よりです。

まあ先ほど田畑先生と少しお話しましたが、このねえ、仏教は、真宗という仏教をわかりやすく表明したものが『観経』ですね。『観経』は申し上げますように、私達の相対分別に合わせて説かれてるからね、理解するのも理解しやすいし、それから人に伝える時も、またそれの方が理解しやすいわけです。

ところがね、今日もまたこれから少しまとめますが、理解しても救われない。理解するとかえってわかることがわからなくなるという面もあるわけです。そこが『大経』の一番大切なところでね、親鸞は理解を超えた世界を『大経』に依って顕そうとしている。だからなかなか難しい。ね。先ほどもちょっとお話しとったんですが、親鸞の立脚地は「三不三信」ですよ。『大経』の信心なんだと。こう申し上げますと、おそらく皆さんの方は、三不信が「機の深信」で三信が「法の深信」だと。こういうふうにはめて考える。考えればそうかも知れません。しかし『大経』の大事なところは、いいかね、不実功德と眞実功德を全部生かしている眞実功德。ここが大事な

んだ。これはもう理解を超えている。普通は悪と善と。相対分別だから。ところが、それを今度は全部活かしているもの、それこそが真実功德なんだと。曇鸞はちゃんと言っているでしょ。そうするとあれは、私的瞭解を超えているために 何を言っているのかよくわからんから、だから「二種深信」の方に引き当てて、あの、ここに来てくださっている方からお手紙いただくのよ。一人や二人じゃないんだ。たくさん来るんだ。全部だいたい二種深信だな。「機の深信がはっきりしないのは、どうも法の深信がわかってないからじゃないだろうか？」みたいなことを言うて。「法の深信がはっきりしてないちゅうことは、求道のなかでどうも機の自覚がわかってないからでないか」と。いっつも”機”と”法”で揺れていく。ね。そして最後には「こうやって悩んでるちゅうことが仏教に立ってる証拠じゃないだろうか」みたいなことを言うて自己満足していく。そんなこと勝手や、せえ、せえ。(笑)そんなことしたって。それやったらなあ、誠に申し訳ない、私の家内が亡くなる時にさあ、亡くなる、そうやなあ一週間前ぐらいやったかなあ、朝一生懸命朝ご飯を作って食べさせなあかんから、一生懸命作つとる時に「あなた、あなた」と呼ぶのよ。「何や？」このくそ忙しいのにと行って、「何や」って言ったら、うれしそうな顔をして「あなた、今日も生きてたわ」って言われました。それぞれ。「今日も生きてる、生かされてる」。そっちの方が親鸞の信仰に近い。機か法か、法か機かみたいなこと言うて暗〜い顔になっている。それやったら、素直に70過ぎまで生かされていることを喜んだ方がマシじゃ。その方が親鸞の信仰に僕は近いと思う。そういう分別を超えて、今この下から突き上げてくるこの“いのち”に生かされている法蔵菩薩の本願として説かれている、これは“いのち”の躍動や。そういう力動感をこのからだ全体で生かされとるんだと言っている、僕は、あれは死ぬ時ようあんなこと言うなあと思ったけど、家内がそう言いました。「おうそうか、良かったのう」ちゅうて笑いましたけど、その方がよっぽど実感としていいと思わへん？ うん、その方が親鸞聖人のこの南無阿弥陀仏の“いのち”の実感としては近いんだ。そういうものを勝ち取らないと生きていくの意味がない。嬉しさもない。ただ歳いって死んでいだけやぞう、暗い顔しとったら。辛いことも悲しいこともあるけど、楽しいこともあるろうが。どっちとも問題ない。楽しいことばかり追い回しとったら人生半分じゃ。辛いこと悲しいことも全部引き受けて法蔵菩薩が本願を立てたんだ。我々の“いのち”になってくれたんだ。これまた、これから喋るから。「三一問答」のところになると、これどうしても喋らなあかん。

まあまあ、そういうことを思っておりますが、まあ思うたことを直接言うても話にならんから、今皆さんと一緒に読んで「三心釈」(さんじんしゃく)、これを今日はもう一度まとめます。きちつとね。そして、それを踏まえて、実は善導大師が「彰隱密」。善導大師は『観経』を確かに説きましたよ。二種深信説いてますよ。二種深信説いているけど、立っているところは本願に救われた『大経』だからね！。そこに立って、例えとして二種深信を言ってる。こっち側(『大経』の本願)がないのに、例えだけ捕らわれると、わかることがわからなくなる。

僕はよう怒られました。前にも申し上げたと思いますが、博士課程の時にゼミの発表が当たってね、あの「二河白道」のところや。一生懸命勉強すると、どうしても「釈尊の発遣と如来の招喚」と、こうなっていくわけやね。こうなっていくと、わかったようやけど、う〜ん怒られるやろうなと思いましたが、机叩いて怒られましたよ。「二人おるのか？ 要するに本は何や？」「二人おるわけじゃない。それは例えや。そういう例えが出てくる本は何や？そこをきちつと押さええ！」ちゅうて、机叩いて怒鳴りつけられました。そうですわね。だから怒られるだろなあ

思っていましたけど、やっぱり怒られました。そんなになっていくのよ、人間、どうしても分別だから。それを何とかして超えていく。その法蔵菩薩の力動性や。これをね、まあおわかりいただくとありがたいと思いますが。

この親鸞という人は天才でね、ここの三心釈で、実は善導大師が「彰隱密」として書いている。つまり、隠れた意味ね。それを「信巻」では表に出して公開した。これが親鸞の仕事です。本来隠れているところを表に出してね、公開していく。これが親鸞の仕事だからね。だからまあ、その意味を僕今日まとめます。だから皆さん、それを良く聞きながら、「ああ、ああそういうことか」というふうにわかっていただくとありがたい。

まずね、三心釈が始まるどころ。もう詳しくお話したのでねえ、詳しくするとまた時間経っちゃうから、少し端折りながらお話をしますが、聖典214ページ（科文番号17）の

「光明寺の『観経義』（定善義）（『観経四帖疏』の「定善義」）に云わく、」とあって、

「如意」と言うは二種あり。一つには衆生の意（こころ）のごとし、かの心念に随（したが）いてみなこれを度すべし。二つには弥陀の意（おんこころ）のごとし、五眼円（ごげんまどか）に照らし六通自在にして、機の度すべき者を観（み）そなわして、一念の中（うち）に前なく後なく、身心等しく赴き、三輪開悟して、おのおの益すること同じからざるなり、と。已上」と。

（西215～216、島12-58）

ここから始まるでしょ。この『観経疏』、善導大師の引用がね。ということは、この文章は一体何を言っているかということ、つまり、「衆生の意のごとし」。衆生というのは私達ですよ。私達の日常の考え方は、比べるということが本になつとるから。だからどうしても、比べて良い者になりたい。立派な者になろう。頑張って何とか成し遂げよう。理想主義やね。これが「衆生の意のごとし」や。わかるね。その「衆生の意」を無視して仏法を説いてもわからんから、仏様は「衆生の意」をよく観て、そして本願の救いまで導くんですよ。これが仏道というものですよという、一番最初にそういう文章を持ってきているわけです。

ということは、ここから先の善導大師の三心釈は、衆生の理想主義をよく見抜いて、その理想主義に則りながら、本願の覚りを皆さんに手渡す。これが釈迦と弥陀の二尊の意味ですよということ、これをまず宣言して始まるわけや。だからこの三心釈は、そのように読まなければならない。となりますね。間違いないね。これ僕の意見じゃない。そうなつとるということ、を言つとる。

だから、善導大師の三心釈は、今言ったように 衆生の意をよく見抜いて、頑張つて努力しよう、そしてわかろうと。こうするしかない。その意を見抜いて、まずは頑張んなさいと。こう言って、励まして、そして、最後には弥陀の本願の覚りを手渡す。これが善導大師の三心釈の意味なんですよということを、最初に親鸞が宣言している。だから、親鸞がそういう文章として読みなさい、私は引用するんだという意図を、まず一番最初に表現している。これ、大事やね。だからそのように読まなければならない。これが大事ですね。

そして、まあ次の文章はもういいね。つまり、凡夫でないものは誰もいない。つまり、誰も理想主義を本にして苦しみ、そして、つまらんことを言うて、その責任を引き受けさせられて、まあもう老いぼれていくしかない。みんな凡夫以外にない。その凡夫の苦しみを救ってくださる。これが如来の本願の教えです。あるいは、もう少しわかりやすく言えば、『観経』の教えなんですよと。こういうことになる。そして、その『観経』の文章が始まるとすぐに、215ページの1行目ね。ここに、

「一つには、世尊機に随（したが）いて益を顕すこと、意密にして知り難し」、お釈迦様が機に随って、私達衆生をよく見抜いて、衆生の本性を見抜いて、そして何とかして仏様の覚りを手渡したい、ということを顕している。”顕”ですね。そして、それは、”顕”として『観経』を説いた。三心釈は“顕”として説いている。ところが、その”顕”として説いた三心釈のあとに、後ろに、「意密にして知り難し」。これは、お釈迦様の深いおぼしめしがあつてね、表向きに、至誠心・深心・回向発願心として説いているけれども、それによって弥陀の本願の覚りを手渡したい。こういう、後ろには、そういう“隠密”ということが隠れとるんだと。こう言ってることになります。

だから、まとめますと三心釈には、顕彰隠密、この二つが説かれている。わかりますね。“顕”としては、至誠心、深心、回向発願心。この三つが『観経』の大変大事なところです。だからここに、「**仏自ら問いて自ら徴（ちょう）したまうにあらずは、解（さと）りを得るに由（よし）なきを明かす。**」

つまり、仏様が『観経』のなかで三心を敢えて問うて、そして、至誠心、深心、回向発願心というこの三つが揃えば、どんな人でも必ず浄土に往生しますよと、こういうふうにお釈迦様が言ってくれたと。だから表向きに言えば、この三心が揃えば浄土の覚りが手に入ると。こういうことを三心釈は説いているのよと。こういうことになりますね。いいですね。

そしてそこから、「**一者至誠心**」、至誠心、ここはさっき言うたように、真面目に勉強しましょうね、真面目に道を求めましょうねと言うと、「ああ『観経』で西の方に阿弥陀さんが居って救ってください」。まずは「一者至誠心」。真面目にやんなさいと説かれておるから、一生懸命真面目にやってみたけども、一体、真面目とは何か？そして、真実とは何か？一切わからなくなっていく。それが至誠心釈のところの親鸞の読み替えでしたね。もう忘れた人がいらっしゃると思うけども、

「**一者至誠心**」。「至」は真なり。「誠」は実なり。」、真実である。「**一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず真実心の中（うち）に作（な）したまえるを須（もち）いることを明かさんと欲（おも）う。**」と。本願を須いなさい。

「**外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽（とんじんじゃぎ）、奸詐百端（かんさももはし）にして、悪性侵（や）め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「真実の業」と名づけざるなり。もしかくのごとき安心（あんじん）・起行を作（な）すは、たとい身心を苦励して、**」云々とあつて、人間の自力では絶対に救われない。どんなことをやっても、それは「雑毒の善」である、ということをお様が真実になって、私達に不実であることを教えてくださった。

皆さんの求道、一番最初そうでしょ。この中に「**仏教わかった！**」言う人がいっぱいいると思うけど、求道を通して仏様の教えが身に貫いた時は、何と愚かなことかと。今まで偉そうに生きてきたけど、何にもわかっていなかったと。申し訳なかったと言うしかないね。その申し訳なかったということが最初の仏様の仕事なんだと。至誠心というのは、これは「雑毒の善」。何をやっても自力では往生はかなわない。これが明確になること。これが至誠心の役割でしたね。

そして、それが深心釈にまで受け継がれて行ってね、皆さんご存知のように深心釈では、二種深信ということが徹底的に言われてくる。機の深信、法の深信ね。これはもう皆さん言わんでもわかるう。「**一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫（こうごう）より已来**

(このかた)、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。」(東聖典215頁～、西217～、島12-59～)、これが機の深信やね。これは至誠心積ではつきりいただいた我が身の事実。それを今度は、「二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は」、『大経』の阿弥陀如来の四十八願は、「衆生を摂受して、疑いなく慮(おもんばか)りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。」、これが二種深信でしたね。

ですから、ここまでは当然のことですが、お釈迦様が人間の比べるという本性を見抜いて「頑張んなさい」と策励して、そして最後には自力では救われないというところまで導いてくださる。これが「顕の義」ですね。ところがこの「顕の義」の後に、機の深信の後、長く、長～い文章が本当はここにあるんです。その中で、「利他真実」、「自利真実」と親鸞が分けてね、要するに自力に関することはここから抜いて、乃至(ないし)して、「化身土巻」に引用している。他力に救われたという感動を現す部分は「信巻」の方にまとめておられる。それでここは、長く長く皆さんと読んでると時間がかかるので、実はここを親鸞がひとまとめにしているところがあるよと申し上げた。それは『愚禿鈔』。特に440ページ～441ページのところ。(西522～、島14-19～)ここに親鸞は、二種深信から始まって、七深心。第一の深信は、「決定して自身を深信する、」これ大事ですね。第二の深信は、「決定してかの願力に乗じて深信する、」すなわちこれ利他の信海なり。これが実は、阿弥陀如来の救いなんだと、こう言ってるね。ですから、皆さんが二種深信を大切にされるのはわかる。自力から他力に展開する。そういう意味では大事なんだ。ところが、その後、いいですか、ここが大事なんだけど、

第三には「決定して『観経』を深信す。」、それから、第四には「決定して『弥陀経』を深信す。」、そして、第五には「ただ仏語を信じ決定して行に依る。」、これは、ここだけではわかりにくいから、440ページの終わりから1行目のところに、この第五深信について親鸞は、こういう内容なのよということを書いとるね。ややこしいかしらんけど、そこをちょっと見るよ。

第五の唯信仏語(ただ仏語を信じる)について、三遣・三随順・三是名あり。そして、三遣とは、これこれ。三随順とは、これこれとあって、最後に、三是名とは、一には「これを真の仏弟子と名づく。」と。こう書いてるね。だから、ここは、その真の仏弟子の前は、仏願に随順する。仏願に随順した者を真の仏弟子と言うと、こう書いてるんですから、これは『大経』の第十八願を示している。いいですね。そうすると、五番目にこれは、第十八願の成就。これを説いて、それによって真の仏弟子が誕生する。ここに印を付けといてくださいと申し上げたね。この真の仏弟子というのは、善導大師のここが一番最初に出てくるところ。だから善導大師が出した言葉と考えてもいい。それを親鸞聖人は「信巻」で、後半は真の仏弟子について述べていくでしょ。だから善導大師の言葉を受けているわけです。ですから、深心積、二種深信、これが「顕の義」なんだけども、その後ろに隠れているのは、実は『大経』の信心なんですよと。

まず、『観経』を信じる、『阿弥陀経』を信じる、最後に『大経』の第十八願を信じて真の仏弟子になっていく。そして、第六には「この経に依って深信す。」とあって、いつかここで質問してくださいってどなたかがね、「ここには決定するという言葉がないけど何故ですか？」と。うん、それは、この前までの三つの文章で決定する、決定する、決定すると言ってきて、そして最後に、「この経に依って深信す」というのは、「これまで述べてきた經典に依って信じるということですよ」というふうに、六番目にここをまとめている。だから「決定する」という言葉じゃなくて、「今まで述べてきたように、この三経によって私達は信心に立つということですよ」とまとめて、

そして、さらに第七番目には、「**また深心の深信は決定して自心を建立せよ**」と。自分自身を見つけるということだと。

これも先程、岡田先生が来られて、「宗教の問いは、自己とは何か、自分とは何か、それでいいでしょうか？」と。その通りやね。西谷啓治先生（京都大学名誉教授；宗教哲学）は、有名な『宗教とは何か』（昭和36年、創文社刊）という本をお書きになりましたが、あの中の最初に「宗教の独特の問いがある」と。それは何かというと、「自己とは何か」ということだと。これが宗教が持つ独特の問いなんだということですから、その通り。自己とは何か。これが私達の最終的な問いなんだから、この『大経』の信心こそがそれに答えている。「自己とは何か?」、「自心を建立するということだ」と。そしてそれが、実は「顕の義」としては、機の深信というところに顕されているんですよ。こういう意味で、「顕の義」では二種深信だけでも、隠れているところでは、『観経』は四十八願は説かれていませんね。だから四十八願を挙げるわけにはいかないから、善導大師は経典を挙げました。しかし、この経典はみなさんご存知のように、『観経』は第十九願を表す経典ですね。『阿弥陀経』は第二十願をあらわす経典ですね。『大経』は、これは成就文、第十八願。これですね。そうすると19、20、18と並んだらでしょ。これは善導大師が表向きに表明してないけれども、善導大師が救われた立脚地は『大経』の三願転入なんだと言っとることになります。そうやね。間違いないね。僕は脚色してませんよ。書いとる通り言っとるんだからね。

そうすると、二種深信の後ろには、隠れてるところには、善導大師の三願転入。これが「彰隠密」という意味なんだと。こういうことやね。書いとる通り言っとるだけだから。そうすると、あのややこしい、なんか長〜い文章のところは、親鸞聖人がちゃんとまとめてくださっている。まとめてくれとるということは、親鸞ここで、とんでもないことを学んだということになります。ああ、善導大師の立脚地、それは『大経』なんだと。そして、ちゃんと三願転入を善導大師ご自身が言うとる。ここに善導大師の隠れた意味があるんだと。『観経』から『大経』へ。こういう意味があるんだというふうに読み取ったのが親鸞聖人だということになりますね。ここまでいいか？ わかるね。

そして、まあせつかく言い始めたんやから、今度は、三つには、回向発願心。こうなっていくね。その最初のところを見てごらん。回向発願心のところ、ここ長〜いところだから、まとめているところは今お話したから、飛ばすよ。そして、回向発願心のところはね、218ページ、2行目に「乃至（ないし）」とありますね（西221、島12-61〜）。ここで乃至されてるのは、さっき言ったように「化身土巻」に引用されてます。今は言うと混乱するからそこを飛ばすよ。そして、**また回向発願して生ずる（浄土に生れる）者は、必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須（もち）いて得生の想（おもい）を作（な）せ。**

これ、わかりやすかろう。親鸞こう読み替えた。『観経』には本願が説かれていないために、「本願力回向」という言葉が使えない。使わない。しかし、これをよく読むと、「回向発願して生ずる者は、必ず決定して、法蔵菩薩が真実心のなかに回向して下さった願をもちいて、浄土に生まれるということが実現するんですよ」と。こういう意味ですから、本願力回向という言葉がなくても、これは本願力“回向”だから、回向を發願するんですよ。こういう意味になりますね。ですから、親鸞聖人は、願に依って浄土に生まれて往くんですよと、こう言っておいて、

この心深信せること、金剛のごとくなるに由（よ）りて、「金剛心」、これが出てくる。そうやね。

そして、ダイヤモンドのように壊れない心、一旦信心を得た者は、ダイヤモンドのように、身は凡夫だけでも、生涯壊れない心によって浄土に生まれるんですよ。その間に、実は群賊悪獣が寄ってくるよというのが二河白道の譬え。だから、金剛心というのは、どんな価値観にも惑わされない。今の世の中で、テレビを観ていると、誰が本当のことを言うとか、嘘を言うとかようわからん。情報交換ばかりや。何が本当か嘘かわからんところで情報交換ばかりしてテレビやっとう。バカかと、あんなもん観てたらバカになりますよ。毎日僕観てますけど。(爆笑) ま、ああいう価値観にも惑わされないでね。この身、凡夫を生き活きと生かしてくださるこの“いのち”。その“いのち”が向かう方向に俺は往くんだと言って、往生していくんだと。だから二河白道の譬えにあるように、どんなものにも惑わされない、というのが金剛心。何故かという、これは「願心」だから。本願の心だから。ね。

そして、大切なとこだけ言います。219ページの2行目(西222、島12-62)。実は、信心が如来の本願、願心だから、**必ず疾(と)く解脱を得るなり**。ここも印を付けてください。「必ずすぐに解脱を得るんだ」。これは、真の仏弟子のところの言葉で言えば、「**必可超証大涅槃**」(東聖典245頁)です。この二つが真の仏弟子の定義になっていきます。「信巻」ではね。言っていることわかる? わからんやろうな。しゃあない、まだ勉強してないんやから。けどこれまで言うたどお、一、二回。「信巻」の前半は、いい、これから勉強していく「三一問答」がヤマです。信心がなぜ如来の世界を開くのか? この道理を明らかにしていくのが「三一問答」。そして「信巻」の後半は、正定聚の機だから、その信心を得た者はどうなっていくか? その中心が真の仏弟子釈です。真の仏弟子のところを見てごらん。245ページ(105)、ここにちゃんと言ってるでしょ。(西256~、島12-87)

「真仏弟子」と言うは、「真」の言は偽に對し、仮に對するなり。「弟子」とは釈迦・諸仏の弟子なり、とあって、なぜ真の仏弟子になるのか?

前、言ったことありますかねえ、いいかね、大乘仏教の常識だったら、真の仏弟子というのは、七地沈空を超えた八地以上の菩薩のことを真の仏弟子というんです。いいですね。そこを知つとかなあかんよ。本当は、真の仏弟子という、菩薩道でいうと、七地沈空を超えた八地以上の菩薩のことを真の仏弟子と言うのよ。常識でね。ところが今まで勉強してきたように、真宗という仏教は凡夫の自覚。人間の自力では救われないうんと言った。その言った人を「**すなわちわが親友(しんぬ)ぞと 教主世尊はほめたまう**」(「正像末和讃」東聖典505頁)というように、『大経』の「東方偈」では、機の自覚を持った衆生をね、「**我が善き親友**」とお釈迦様の方が言うてくれたから、だから真の仏弟子になるんだと「東方偈」ではそう書かれてる(東聖典51頁)。

だから、ここで(東聖典245頁)「真の仏弟子」と言うは、「真」の言は偽に對し、仮に對するなり。」と言って、「弟子」とは釈迦・諸仏の弟子なり、」と言って、本願によって「金剛心の行人」になる。これがまず一つ。わかりますね。金剛心の行人というのは、さっき言ったように。どんな価値観にも負けないで、身は凡夫であっても、いのち終わるまで“いのち”が向かう方向、浄土に帰っていくんだという大きな感動を得てね、その道を貫いていく。それが金剛心の行人なんだと。なぜそういうことが出来るかと言うと、これは、いただいた信心こそ、実は如来の本願だから。その如来の大涅槃という覚りをそこに開くからだという意味で、「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」。これが真の仏弟子の定義になります。親鸞聖人の定義ね。この定義は今の善導大師のところから来ているのがすぐわかるね。第十八願のところの成就を真の仏弟子と善導大師は

言うた。これ、七祖の中で初めて言うたんだからね。真の仏弟子なんていうのは。だからこの言葉を大事にされた。

そして、回向発願心。表向きには、自分の自力で頑張って浄土に生まれていきなさいよと、こう言っとるけど、本当は、裏から言えば、それは「願心に依れ」と言ってるんであって、だからこれは、彰隠密の意味から言えば、金剛心の行人と必可超証大涅槃。これが回向発願心のところの裏の意味だと。こう言っとることになる。ややこしいか？ 歳入っとるからややこしかろうな。(笑) ええ、ややこしかろうと思う。わしゃこんなこと考えて寝られへんのや。夜中ずうっと、朝まで。

こう言っとる。そうやね。そうすると、しつこいようですけども、『観経』の表向きの意味は、自力で頑張って浄土に生まれなさいと。人間の本性を観た仏様がそう勧めてくれている。それによって、二種深信、自力では救われない。その時に、「無量寿」という大きな自分の“いのち”に目覚めて、この“いのち”の通りに生きていきたい。人間は「考えるということ」が「生きるということ」に勘違いしとるから、いつの間にか出来た「自我」を「本当の自分」と勘違いしとる。そして計算したり、勝ったとか負けたとか、そんなことばあかり言って歳入っていく。そうやなくて、「“いのち”の言う通り生きなさい」と。言葉がちょっと適当でないかもしれんけど、わざとわかるように言えば、猫やら犬やら花やら草やらと同じ“いのち”をいただいたんだから、そして、他の“いのち”は、いのちの通り生きていのちの通り死んでいく。人間だけが途中で出来た自我を振りかざして、理屈を立てて、合うとか合わんとか言うて苦しんでいく。そんなことをするくらいなら、いのちの通りに生きていきなさい。そして、無量寿という“いのち”こそ、実は本当の自心なんだと。「自心を建立する」。初めて自我のいのちが嘘だ、分別が嘘だとはっきりわかったと。だから、この無量寿、南無阿弥陀仏の“いのち”を生きていくんだと。だから裏には『大経』の救いが隠れている。そして、『大経』では「本願力回向」というんだけど、この信心こそ、「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」というはたらきを持つとるんだと。これが「顕の義」と「彰隠密の義」と、分けて考えなければいけない。表向きにはお釈迦様は、自力を策励して頑張んなさいと。ここも自力によってしっかり頑張っていきなさいと、表向きには言っているようだけど、しかし、裏から考えると、本願力に依らないで何の価値観にも迷わされない、そんなバカなことなからうが。毎日テレビ観て、あいつは本当か嘘か悩みながら観て、やっぱりどうにもならんと。こんなもん観なよかったと、毎日僕は思ってます。

というふうに、自我のいのちの価値観なんていうのは、それはみんな共通しているから、わかったように思う。理解したように思うけど、そんなものはどうにもならん。そうじゃなくて、この無量寿の“いのち”こそ本当の自分なんだと気付けと行って、法蔵菩薩が呼んでくれとるだろうがと。そのはたらきがわからんかねと、善導大師も裏で言ってることになります。

ですから、この(板書の)赤で書いたところ、これが善導大師の「彰隠密」。黒で書いている『観経』の表向きを「顕の義」。こういうことなると思いますね。そうすると、親鸞聖人の「信巻」を見てると、これから読んでいったらわかります。この善導大師の、この領解によって。もう一つは、三願転入は、『大経』のお釈迦様の智慧段の教説に依ってるんだと、私は申し上げましたね。善導大師もそうなんだ。『大経』の智慧段の教えに依って三願転入を表明している。だから三願転入とそれから、真の仏弟子。金剛心の行人、必可超証大涅槃、これを表に、善導大師の場合は隠れてるけど、これを表に出して、公表していく、公開していく、その理由を訪ねていく。それが

『教行信証』の「信卷」の親鸞聖人の仕事だということになります。その辺をよく見極めて読んでいくとよくわかるというふうに思います。どうですか？ いいかね？ 今まで言ってきたことをまとめとんのよ。ああせつかくやから最後までまとめようか、ほんなら。

ここまで言ってきたやろうが、回向発願心まで。そうすると、これまた大事なことやから時間がかかるけども、前に言うたぞ、これ。この二種深信の一番最後のところね。221ページのところね。この三心釈が、回向発願心の二河白道の譬喩が終わってね、そしてこの三心釈が終わりますよというところね。親鸞はそこまで引用している。221ページの終わりから3行目。

三心（さんじん）すでに具すれば行として成ぜざるなし、願行すでに成じてもし生まれずは、この処（ことわり）あることなしとなり。（西227、島12-65）

ここの今の言葉は、実は前に勉強したんやで。皆さんもう忘れとろうな。これは、道綽の三不三信のところの一番最後の言葉。これがこの言葉です。だから、「三心すでに具すれば」というのは、三心（さんじん）と書いてますから、『観経』の三心が実現してるから、だから、「もし生まれずは」というのは、第十八願の「もし生まれなかったら」。三心ということが実現して、もし生まれなかったら、本願が立てられたという甲斐がないではないか。これが道綽の三不三信の結びの言葉なんです。その言葉を善導大師も三心釈の結びの言葉にもってきてる。だから、三不三信というの、さっき言った『大経』の信心なんですね。道綽の場合でも、いかにも二種深信として、「顕の義」では二種深信として『観経』では説いてるけども、「彰隠密」から見ると、『大経』の救いが説かれてるでしょうと。だから、道綽が三不三信で言った、あの三不三信と同じことをここで今まで私は申し述べてきたんですよと。こういう言葉で終わっていく。

まあ、私は毎日毎日寝られないで、こんなことを考えてますから、毎日考えてる人と、二ヶ月に一遍ここに来てポーッと（笑）、なっ、聞いている人との落差があるから、（笑）わしは至極当然だと思ってるのやけど、皆さんの顔を見ると、ポーッと聞いて（笑）。わしはものすごく大事なことを言うとなんやけどなと思っねんけど、皆さんの顔を見ると、まあそうかあ、二カ月に一遍来て、よう寝てポーッと聞いとると、はああ、そうでもあろうかなあと、こういう顔をしとる。もう、情けない。（笑）けど、そう言うところが。僕の意見じゃないんだ。そう言っとるんだ。だから善導大師は、自分の信心は、これは表向きには「顕の義」として二種深信として言うよと。しかし、僕は道綽のあの三不三信の信心を今受け取って、ここでその意味を述べてきたんですよと。こういうことを言ってることになる。いいな。（会場から「はい」）もう「はい」って返事はいいけど、わかってるか。試験に出すぞ、試験に。（笑）まあここまでいいね。僕は自分の意見を言っていない。そうなっとうらやうが。

そして、そのあと、『般舟讚（はんじゅさん）』を引いてくる。（221頁-23）

（般舟讚）また云わく、敬いて一切往生の知識等に白（もう）さく、大きに須（すべか）らく慚愧（ざんぎ）すべし。 自力では救われないということをよく知りなさい。

釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、本当はこれ、皆さんよく知っておられる方は、「釈迦弥陀は慈悲の父母」（「高僧和讃」東聖典496頁）と、こういう言葉を知ってるね。親鸞聖人は十分それを承知しとって、わざわざ『般舟讚』のこの文章を持って来た。それは、三心釈というのはお釈迦様の説法です。『観経』はね。そしてそのお釈迦様の説法の中に「彰隠密」として『大経』の本願が隠れとる。これが善導大師の説法、言い方やね。だから、三心釈はお釈迦様の説法なんだということを受けて、ここに「釈迦如来は慈悲の父母」、敢えてお釈迦様を出した。それは『観

経』はお釈迦様の説いた経典だからです。もちろん『大経』もお釈迦様が説いたんだけど、あれはね、どう言うたらいいか、お釈迦様が説いたんだけど、お釈迦様が阿弥陀の覺りに立って、そして、阿弥陀の覺りそのものを説いている。だから阿弥陀の直説と言ってもいい。だから『大経』には方便ということがないんだ。だからわからん。難しい。『観経』は方便があるから、私達の性質をよく見抜いて、それで頑張んなさいと言うて、お釈迦様が手立てしてくださる。それが釈迦の**大悲**なんだと。ここにそう言うことになる。これはわかりますね。

そして、ああ、これかあ。『往生礼讚』の文章やなあ。この文章は、前にも申し上げましたが、一番大切なところは一番最後の行。

いま弥陀の本弘誓願（ほんぐぜいがん）は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、

「下至十声一声等に及ぶまで」となっているのが『往生礼讚』です。『往生礼讚』は、「下至十声一声」になっているわけ。ところがそれを「聞」に書き変えている。「聞」というのは信心やね。だから、お釈迦様が三心釈として説いてきた三つの心というのは、実は名号に帰する信心のことですよというふうに、ここで、行と信とは離れないんだと。「下至十声聞等に及ぶまで」と言っている『礼懺儀（らいさんぎ）』を引用してきます。

これは、またあいつがそんなこと言うると思われるのもしかただから、これは、前に「行巻」で勉強してきたんやぞ。もう忘れてるな、完全に。完全に忘れてると思う。191ページ、「行巻」ちょっと開けてごらん。191ページ（98）ね。ここから行の一念釈というのが始まるんや。

おおよそ往相回向の行信について、行と信がひとつでしょ。行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念と言うは、いわく称名の偏数（へんじゆ）について、選択易行の至極を顕開す。これが行の一念釈。この文章は、その後、

かるがゆえに『大本』（大経）に言（のたま）わく、とあつて、仏、弥勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と。

これは『大経』の弥勒付属の文章です。この文章は、明恵が『摧邪輪（さいじゃりん）』の中で、法然がここの「歡喜踊躍して乃至一念せん」というところを、「念仏」と法然が読むからね、明恵が怒ってね、「バカなことを言うな」と。ここはまだわかる。しかしね、この「乃至一念せん」の前に「歡喜踊躍」という文章があるでしょうと、「信心歡喜」、「信心がなければ、乃至一念ということ、念仏をしてもそれは「空念仏」になるじゃないか」と。「だから、この文章の大事なものは「歡喜踊躍」というところに眼目があるんであつて、乃至一念を法然が全部「念仏」に読む。それは許せん」と怒ったのが明恵です。その時に三つの文章を引用する。言うたぞお、覚えてるか？ まあ今日初めて来た人がおるらしいから覚えてる訳がない。（笑）あんな、この第十八願の成就文な、**あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。**（『大経』下巻、東聖典44頁）、第十八願に出てくるな、乃至一念が。

この乃至一念と、それからこの弥勒付属の乃至一念と、もう一つは「三輩章」のところにあるんだ。「三輩章」ってわからんやろうな。『大経』の「三輩章」にある。「三輩章」ってわかるか、『観経』で言えば上品上生から下品下生までを表すのやぞ。その「三輩章」のところに、46ページ、書いとろう、書いとるが完全に忘れとろうが。見たらわかる。初めて聞いたような顔しとるから。（笑）最初から7行目のとこな。ここに、**もし深法を聞きて歡喜信樂せん。疑惑を生ぜず。乃至一念、かの仏を念じて至誠心をもってその国に生まれんと願ぜん。**と（西43、島1-41）

ここに乃至一念という言葉が出て来る。『大経』の下巻に三つ出て来るんだ。な。わかるな。その乃至一念を法然は全部「念仏」と読む。ね、「称名念仏ひとつでいいんだ」と。「十八願ひとつで、念仏ひとつでいいんだ」と。実際面は「念仏」なんだと言って、念仏ひとつで読んでしまう。それを明恵がカンカンになって怒ります。ふざけるなど。

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん」と書いとるやないかと。だから信心の方が大事なんだと。もし、乃至一念を法然が言うように念仏と認めたとする。認めても、信心がない奴が念仏しとるのは、それは空念仏やないかと。だから、「信心歓喜」。これが大事なんだと。それがやがて菩提心になるんだと。こう言って明恵が三つの文章を非難するのよ。ね。親鸞は明恵の名前も出してない。『摧邪輪』の名前も出てない。なぜかという、僕らも含めて、本気で念仏信じている奴なんか誰もおらんから。皆さんご門徒さんやからあれやけど、時々まあ法事なんか行くと、酔うたらすぐ本音が出るからな。ご門徒さん、「ご院家さん、あんたそんな難しいことばかり言うとするけど、念仏なんてややこしいこと言わんと、酒呑んでコロッと死んだらいいじゃねえかちゆなこと言おうがあ。あれ、明恵です。(笑) いつの時代でも明恵だらけやから。ね、だから『摧邪輪』とか明恵とかということを書いていない。だけど『教行信証』を見ると、今問題にした三つの文章は、行の一念積、信の一念積、そして「化身土巻」にちゃんと親鸞は配置しとる。だから明恵の言った非難をちゃんと受けて『教行信証』が書かれている。そのひとつがこの行の一念積です。これは弥勒付属の行の一念積。いいか、もう一回読むぞ。

(191頁 -98)「おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。」、いいかね、この行信というのが聖道門ではわからん。行と信と離れて考える。皆さんも離れて考えとると違うか？ どうや？「行信不離、行信不離」と言っっても、元々の頭が行と信と離れているから、言えば言うほど離れていく。体験で言えば、いいか、本願の教えがこの体を貫いた。その時に五体投地して、「南無阿弥陀仏」と、こう言おうが。身の方が先やろうが。行の方が先なんだ。ね、だから行信。それは信もちゃんと付いとる、後ろに。だから本願の教えに帰依するという体験から言えば、行信不離なんだけど、それを考えてしまうと、行と信と別に考えて、その代表が明恵です。だから、「ここは行信不離ですよ」と、こう言っついて、その後、さっき言った(東聖典191頁 -100)、

光明寺の和尚は「下至一念」(散善義)と云えり。また「一声一念」(礼讃)と云えり。また「専心専念」(散善義)と云えり、と。已上 とあって、**智昇師の『集諸経礼懺儀』の下巻に云わく、と。さっきと一緒やね。「行巻」とね。智昇師の『集諸経礼懺儀』に載っている『往生礼讃』を見ると、「下至十声聞等」になつとる。『往生礼讃』は、「下至十声一声」になつとる。だから、最初に、「光明寺の和尚は「下至一念」と云えり」と書いてある。そして、「「一声一念」と云えり」と『往生礼讃』に書いてある。善導はこう言っているだ。ところが、智昇は、善導大師の『往生礼讃』をまるまる写しているのよ。まるまる写しているのだけど、ここだけ変えてる。「下至十声一声等に至るまで」のところを「下至十声聞」と変えてる。これが大事。聞というのは信心のことだから。ね、だから、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称える名号と信心とは離れませんよと、智昇が言っとするでしょうと言う時にこの文章を持って来ている。いいね。その同じ文章を、またさっきのところに持って来ている。どこやったか、もうわしがわからんようになつとる。**

わかるように言うのも骨が折れるぞお。わかるように聞くのも骨が折れようがあ。(笑) 222ページの2行目のところに同じように『集諸経礼懺儀』を持って来とろう。そして、同じ文章が

出てくるでしょう。「下至十声一声に及ぶまで」のところが、ここも「下至十声聞等に及ぶまで」と言っている。ということは、「行巻」に引用してきた意図と同じ意図でわざわざここに引いてるんだから、親鸞は、いいかね、『観経』でお釈迦様が「三心を備えたら、みんな往生しますよ」と、こう言っとるから、だから三心について、至誠心はどうだ、深心はどうだ、回向発願心はどうだと今まで考えて来ましたと。しかし、それ、よく考えてくださいよと。念仏の信心のことだからねと、いうふうに、ここで念を押しとる。いいね。(笑) もう疲れて来たか? はい、ご返事が悪い。疲れて来てるんかもしれん。(笑)

というように、ここで、「念仏の信心なんですよ」ということを押さえて、一応、三心釈が終わります。そうやね。これ、微に入り細に入り、親鸞が丁寧に書いていると思わへんか? なあ。もう休まなあかんのや。そして、『往生礼讃』の文章があって、「三一問答」が始まっていく。『往生礼讃』の文章は、この「三一問答」の前と、「化身土巻」の「三経一異の問答」の二つの問答の前に、源信の文章がある。だから、あの親鸞の「三三の法門」と言われる親鸞の領解を決定したのは源信です。ね、それが源信の文章で押さえていくということになってきますから、それも大事なのよ。取りあえず、一回休憩しましょう。ちょっと頭を切り替えてください。すいません、ぎゃあぎゃあ言いまして。申し訳ない。(休憩)

講義 2

ええ、もうしばらく時間がありますからお話をしますが、難しかろう? 難しいか? (会場から:「難しいです」)、はああ、それな、勉強不足としか言いようがない。(爆笑) だってさ、私は自分の思ったことを一つも言っていないぞ。こう書いてますと言っているだけやぞ。その書いとるところを知らんからな、難しいと思うとる訳や。やっぱり『教行信証』を今勉強してるのだから、今勉強しているところぐらいは読んで来い。(笑) 忘れてもいいから読んで来い。そのうちに段々憶えていくのやから。何んも読まんでおまえ、ええ、映画館で映画観るような顔して、こ〜うやって(笑)しとつてもな、わかる訳がない。親鸞20年かかったんどお(笑)。

まあ、三心釈のところを書いとる通りを読むと、こうなっとる。ですから、これね、法然という人は偉い人でね、親鸞に『観経』を講義するんだけどね、「この『観経』の三心釈は『大経』の三心(至心・信楽・欲生)なんです」ということを法然が親鸞に何度も言うて聞かせるのよ。

「『大経』の三心なんです」とよく読んでごらんと。「顕彰隠密」とあって、彰隠密のところでは、ちゃんと『大経』の信心を説いているでしょうと。こういうふうに言ってね、そして『観経』の三心(さんじん)は『大経』の三心(さんしん)として読まなければいけないということを何度も教えるんです。それは、こうなっているからですと。善導自身が『大経』の信心を説いているからです。ここひとつ知っといてください。

それで、こまったなあ。それで、皆さんは、「二種深信、二種深信」と。親鸞というのと、とにかく二種深信と思っとるかも知らんけど、いいかね、『大経』の信心はそうじゃないんだ。いいか、それを今日はお話して、そして、その謎を解く「三一問答」に入っていくから。いいか? これ消していいか? さっき何か写真撮ったバカタレがおろうが(爆笑)、わしゃちゃんと向うで

見とった。(笑)全部書け！紙に。ほんとにまあ今時の奴はもう、全部見とるぞわしゃあ。古典の勉強なんだから、古典の勉強は暗記しろ。「友遠方より来る。また楽しからずや」と。これが明治の頃の教養人だろうが。あれ『論語』なんか暗記しとるんだ。古典の勉強ちゅうのは暗記するまで読めちゅうこと。ええまた、なんか、ああ～(笑)。勤行しょうが勤行しょうが、そんな時に『歎異抄』でもいいや、『教行信証』でもいいや、読め少しずつ。そうすると少しずつ、「あれ、どこかで聞いた」とかなるから。だからちよとずつそうして読んでいかんとあかんのやろ。

それで、いいか、七祖の中で『大経』の信心を明確に一番最初に表明した人は世親です。天親菩薩。ね。何で世親と言うかという、旧訳、古い訳では天親と言います。ところが、新訳、新しい訳は世親と言います。親鸞聖人は文献学者としてもものすごくよく出来た人だから、晩年、新訳が世親と言うんだということを知ると、親鸞は新しい世親という言葉を使います。僕は親鸞に習って世親と言っている。そういう意味です。わかりますね。親鸞という人は文献学としても素晴らしい学者だからね、だから「新しい訳は、ああ世親なのか」と知った時から、天親菩薩を世親菩薩と言うようになります。

世親菩薩が『大経』の信心を表明しようが。それは知つとるな？

世尊我一心 帰命人十方 無碍光如来 願生安楽国 (『浄土論』「願生偈」東聖典135頁)

これが『大無量寿経』に説かれたお釈迦様の教えを、この身でいただいて、そして世親菩薩が自分の信心を表明した言葉。これがそうやね。そもそもいいか、ここで「世尊」と言つとろうが。君ら世尊と言わんやろ。普通「釈尊」としか言わへんと違うか？ この世尊と言う呼び方は、生きたお釈迦様を呼ぶ仏弟子の呼び方。ね。2000年も経って(約900年後の言い間違い?)生まれた世親が「世尊」って何やねんと、何でこんなこと言うのか？とて問いを立てて、註釈を立てるのが曇鸞の『浄土論註』。だから、この「世尊」というところの註釈は大事です。ね。

まあこれ以上言うと頭が混乱するから、ともかくこう言ってるね。生きたお釈迦様に会うたんや。『大経』を通して。それは『大経』の覚りをこの身にいただいた。こう言っているんだ。そしてその信心の表明が「一心」の表明。一心、信心やね。そして、あなたが『大経』に説いておられる「尽十方無碍光如来に帰命します」。そして、「尽十方無碍光如来の世界である安楽国に生まれたいと思います」。だからこの二つで信心の表明をしている。これがそうやね。なぜかと言うと、『大経』は、「一心帰命」として説く部分と、「三毒五悪段」以降、「一心願生」として説く部分と二つに分かれているから、世親もそれをちゃんと踏まえて二つで表明している。世親偉かろうが？ 偉い、この人は。天才よ。

そして、いいか、ここから先、これな、曇鸞が言うように、「我一心の表明」なんだ。だから読み下すと、「尽十方無碍光如来に帰命します」と。こう言つとんのやな。そやな。それが信心の内容やな。そうやな。ところがさ、いいか、これご本尊やぞ。そやろ。ここにもどつかあるはずやぞ。無かったらもぐりやぞ。(笑)どつかある。隠しとつたら彰隠密や。言ってることわかるか。つまり、「信心が如来です」と言つとんのやぞ。そやろ。僕が言っているのじゃねえぞ、世親がそう言つとんのや。そうすると二種深信じゃなからうが？ 信心が如来そのものだと言ってるわけですよ、世親が。これが『大経』の信心の一番最初の表明なんやぞ。いい？ わかるね？ だから、みんな不思議そうな顔しとるけど、そうや、不思議なんや。「信心が如来です」。そんなバカなことないんだ。僕らの分別では考えてもわからん。最初っからね。けど、こう言つとる。そうやね。それを踏まえて、親鸞は、これも勉強したんぞ、『教行信証』の「総序」、

竊かに以（おもん）みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。と、こう言つとるな。（東聖典149頁）、安心した、知つとるじゃないか。（笑）それぞれ。それな（笑）、みんな知つとるから覚えとろう。すらすらと出てこう。何も感動してなからう。それ感動せい、もうちょっと。それも、いいか、よう考えてみい、信心の表明をしとんのよ。「竊かに以みれば、私の信心は本願と如来です」と言つとんのやぞ。そう思わへんか？ 親鸞そう言つとろうが？ そやな。そうすると世親が『大経』の信心を表明したのと同じことを親鸞は『教行信証』の「総序」のはじめに言つとんのやぞ。

ちょっとな、これなあ、説明しても一如の真実を説くのが『大経』だから、一如の真実というのは、衆生の信心と如来とは違うもんなんや。違うもんなんやけど、ひとつだと言って説くのが『大経』の一如の真実ということなんだ。何でそんなことが起こるか？ これは、これから「三問答」のところで親鸞が少しずつ証明していくから、それに依つたらいいのやけど、今日は「総序」の文章について少しだけ言っておく。

「竊かに以みれば」というのは、これはあんまりいい字ではない。これ、「窃盗」の「窃」（旧字）という字や。どんな字やな、あれ、盗むという字。つまり、「凡夫の私が仏様の大悲、覚り、あるいは仏様の世界を知ることは出来ない。ほんのちょっとだけいただいたところを表明しますと」。こういう意味や。だから謙譲語。「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。」、こうなつとるな。こっち側は、本願と光明、仏様。だから私の信心は仏様なんだと。本願と光明なんだと。そのはたらきが私達の難度海、渡り難い世を渡してくださる。そして、無明の闇、これを破ってくださると、こういうことだから、因果の関係から言うと、いいかね、これは如来の因、如来の果。こちらは衆生の無明の闇というのが原因になって、そして、渡り難いこの難度海というものを作っている。そういう意味では、こちら側は衆生の迷いの因と迷いの果。こちら側は、救おうとする如来の本願の因と尽十方という果。如来になったという果やね。これが私の信心の内容ですと言ってるんだから、さっきから言ってるように、信心が如来だと言っている。親鸞も同じように。ここまで間違いなからう？ 間違いがないな。三人しか頷いてねえぞ。（笑）書いてる通り言つとんだから間違いなからうが、親鸞こう書いとる。

そして、いいか。「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」と。こうなつとる。そうやね。そして、「無碍の光明は、無明の闇を破する恵日」である。こうなつとる。こうなつとるね。ともかく、親鸞は、私の信心は、私の無明の闇を破り、難度海を渡らしてくれる大きな船のようなはたらきである如来であると。ここまで間違いがないな。

まず、ここがわかってほしい。あのな、「無碍光如来」とこう言うけど、あそこ、ピカッと光つとろう。後ろにある（後光）のは、四十八本ある。だからあれ、本願の教えだからね、四十八本ある。つまりな、いいか、「無碍光如来」っていくら言われても僕らようわからんやろう。本願の方はわかるぞ。『大経』に説かれているのだから。勉強してないだけで、読んでないだけで、本願の教えがあるちゅうのは聖典開けばわかるが。だから、いいか、私達に与えられているのは本願の教え。これが私達にわかる形として与えられている。間違いがないな。『観経』で、あんまり言うと時間なくなるからな、『観経』で韋提希（いだいけ）が華座観のところで、（東聖典101頁）住立空中の阿弥陀さんに遇うて、五体投地して「南無阿弥陀仏」言うんだ。そして私は、今お釈迦様に遇うて救われたんだから私はいいんだと。あとの衆生はどうするの？と。つまり、お釈迦

様が死んでしもうた時に、後の衆生はお釈迦様に遇えんやないかと。どうしたらいいのやと言ったら、『観経』を読んだらわかるわ。蓮華を見なさいと。阿弥陀さんが立つと蓮華を見なさいと。蓮華は、「高原の陸地には咲かない。汚泥の湿地に咲く」と。泥田。煩惱の泥田の中で、その泥を救おうとして立てたのが本願だから、だから、後の衆生は本願の教えを聞きなさいと出て来る。そういうことやな。どこを言っとるかわからんかったら今日帰って探せ。『観経』に出て来るんだ。

だから、私達に与えられているのは、四十八願の本願の教え。これは、『大経』に詳しく説かれている。いいね。その本願の教えが身に落ちるか落ちないかを悩んだのが親鸞と考へ。

あんな、皆さん仏教を理解するのに精一杯さ。もうそろそろ呆けかかってきとんやからな(笑)。理解するのが精一杯やけど、いいか、よう考へてみ。あのな、私は谷大ずっとおったけど、いいか、大谷大学で4年で出る学生は、専門で2年ゼミで勉強をする。大学院に行けば修士で2年勉強する。博士課程に行けば3年勉強をするから、大学院5年、文学部2年で7年だ。ここまで行くと、まあ僕と対等に話しが出来るくらい勉強をしとる。けど、専門2年で普通は卒業する。その連中でも50枚の論文を書いて卒業する。そうすると、いいか、ちょっと勉強しただけでもわかろうが、真宗の勉強だいたいわかっとうろがみんな。二種深信大事や。どうも機の深心、自力で救われんということがないと どうも、本願がわからんらしい、ぐらいのことはわかっとうろが。いいか、2年勉強してわかるぞ、それぐらいは。親鸞20年勉強したんやぞ。全部わかってます。ただ、身に落ちるか、落ちんかが問題だった。わかる、言っとることは。

だから親鸞の求道というのは、理解するとか理解しないとかという話じゃあないぞ。もう浄土教の教義のみならず、大乘仏教全部わかっているから。全部知ってた。だけど身に落ちるか落ちんか、それが問題やった。自力無効ということがわからなんだんや。何でかと言うと、僕らはすぐ四十八の本願の教えを一生懸命理解してわかろうとするけどわからん。あるいは、聖道門だったら修行をして、修行するけどわからん。覚りがわからん。そうなるとうろがなると、努力が足りんからやと考へる。どうや？ そうやな。一生懸命頑張っても自分が達成出来なかつたら、ああ努力が足りんからやとしか考へられへん。そうやな。だからそれを何度も何度もやっているうちにさ、本当に出来んようになると、もういい、止めたと諦める、僕らやったら。そして仏教なんかつまらんとふて腐れる。な。だいたいそれが落ちや。

つまり、僕らは本願の教えをいくら学んでも意味がわからんから、何のことかわからんけど、親鸞わかったというのや。いいか、その時には、結果としてわかったのではないぞ。なぜ迷っているかという因がわかったというわけや。人間が迷つとる原因がわかったというわけや。腹に落ちた時は。そうや、そう書いとる、親鸞。そんな不思議そうな顔せんといてくれ。親鸞がそう書いとる。そうやな。そうするとこれは、人間が逆立ちしてもわからへんぞ。迷つとる原因っては何や？『大経』には「苦の本を抜く」と書いている。(東聖典13頁)苦の本って何や？ 味の素ぐらいやったらわかるけどな。苦の本って何や？ それがわからん人間には。このわからんことを本願の教えが教えてるねん。それで、あああこんだけ努力しても努力してもわからなかつた理由がはっきりしたと。原因がはっきりしたと。努力が足りんかつたんじゃないと。原因がわかったと言ったのが親鸞やな。その時には何が原因か、はっきり言うと「自力」。今の言葉で言えば「自我」。ここに迷いの原因があると見抜かれた。僕らは辛いことがあつたらいつも言うように、この世で地獄・餓鬼・畜生という目に遭うたことあろう？やっぱ。辛かつた。辛かつたらさ、必ず人に文句言うぞ、「あいつが悪いからや」と。だいたい皆さん、もうだいぶん歳入つとるけど、お

嫁さんに来てな若い頃、たぶんお美しかったでしょうが(笑)。そのころ家に入ると、やっぱり難しかろう？　そしてめると、「くっそう、姑が、あいつがあんなこと言うからや」としか思わん。そうやな。だから必ず苦しかったら、目が外に向いているから　外に原因があるとして恨むしかない。

ところがそんな、ちょっとした教養人でも言っとんのやぞ。例えば夏目漱石。「流れに竿差せば、波が立つ」。そやろ。流れに自我の竿を差すから波が立つんであって、原因はその自我のところにあるんだと。だから彼は、晩年「則天去私」(意訳；小さな私にとらわれず、身を天地自然にゆだねて生きて行く)と言って、天に則して、私を消していくと。あれは、禅宗の覺りに近いんだ。けど、迷いの原因は自分の自我のところにあると。だから彼の作品は消えないよ。やっぱり。近代の走りだね。そんなこと言うたら、僕教養があるから言いたいこといっぱいあるんだ。(笑)

正岡子規もそうやぞ。全部。あれも写生やな。見たものを見た通りに言えと。そうしたら感動すると。だから彼の、何か瓢箪がひとつ下がるとるみたいなことを言うて、けどそれは、もし感動したとしたら、それをその通り言えば読んだ人も感動するからその通りに読めと、こう言われるんだ。あれを教えたのは中村不折。中村不折って洋画家なんです。清沢満之の絵を描いた、大谷大学に清沢満之の絵があるけど、あれ、中村不折の絵や。洋画家は写実やから、だからそれを教えるんだ、正岡子規に。ところが正岡子規が悩むのは、見た通りを見た通りに描けと言うけど、見たのは自分の自我じゃないかと。そうやね。だから自我を超えた事実というのは何なのだと言って彼は悩んで行くわけや。偉いんやぞ、あの頃の人達はみんな。『病牀六尺』読んだらわかるわ。「今日本郷から使いが来た」と。「おまえは仏教を信じて救われるか、気が狂うか、自殺するかどっちかや」と言って、本郷から使いが来たとちゃんと書いてる。あれは暁鳥敏が行ったんや。『病牀六尺』を見て、苦しんどるなと。

そもそも清沢満之と正岡子規は東京大学の宗教哲学で一つ違い。だから清沢満之は天才だということとは正岡子規は知っている。あいつは東大に来てるけど、来た時は何やってるかいったら、勉強せんといつつも夏目漱石と将棋しとる。まあそんなこと言うたらものすごく面白いんやけど。とにかく、あの頃の人達、近代が始まった時には、近代の自我というのがどうもおかしいと。だからそれをどう超えていくかということ、みんなそれぞれの世界で努力した。夏目漱石は文学。正岡子規は歌(俳句)。彼も小説家になりたかったんやぞ。それで坪内逍遙のところへ小説書いて持っていった。そうしたら坪内逍遙はこんなかんと言った。ただお前この中に書いとった歌良かったねと褒められるんだ。それであれ歌詠みになる。そして歌の世界で自我を超えるということはどういうことかと言って最後まで苦しんで行くんや、『病牀六尺』は。わかるね。

そうやって自我のところに苦しみの元があるということは、日本の近代が出発した時にみんなわかっていた。だからそれをどう超えるかということ、みんな努力したんだけど、清沢は仏教でそれを超えた。親鸞でね。そんなふう「迷いの本」。これが本願の教えに見抜かれとったということがわかったのが親鸞や。その時に本願が「尽十方無碍光如来」になる。わからんかなあ。本願の教えを尽十方無碍光如来と仰ぐのは、本願の教えが届いた、その時に人間が逆立ちしてもわからんことを仏さんの方が先に見抜いて教えてくれとった。「光になった」と言って頭をさげる。だから、あるのは本願の教えやけど、本願の教えが届いた時に「尽十方無碍光如来」、「南無阿弥陀仏」と皈依した。だから親鸞が無碍光如来にした。と言ってもいい。あるのは教えしかない。それは教えが、人間が東大行こうが、みんな東大出だからね、夏目漱石、正岡子規、清沢

満之、東大行こうが京大行こうがわからんことを、五劫の昔からちゃんと見抜いて仏様が説いてくださった。

第一願が「無三悪趣の願」や。私が阿弥陀になった時に、阿弥陀の国に地獄・餓鬼・畜生があったら自分は阿弥陀にならんと誓っとる。普通考えると、「おうそうか、浄土には地獄・餓鬼・畜生が無いんだ、いいとこやな」ちゆなもんで、島田紳助がテレビで何回か言うとした。宗教の時間が一番好きで、先生がそう言うから、一番後ろで「おうい、そこいいとこやのう、おいみんなて修学旅行に行こうやねえか」と言ったら、えらい怒られた言うて。普通それぐらいしか思わんが、けど親鸞はわかったのよ。だってよう考えてごらん。地獄・餓鬼・畜生があったら阿弥陀の世界じゃないぞ。それをわざわざそう説いてるちゆうことは、法蔵菩薩が私達のところに身を捨てて、煩惱の中で、人間の煩惱こそ地獄・餓鬼・畜生をつくっとると見破ったから、それが無くならんと阿弥陀にならんと誓ってるわけで。そうやな。だから、阿弥陀の世界に地獄・餓鬼・畜生があるわけない。地獄・餓鬼・畜生があるのはそっちやということをまずは教えている。成就というところから読めばそうなんや。そうやわな。そっちや言うて、そうやそうや、プーチンと金正恩、あれが悪いんじゃないかとみんなすぐそんなことしか思わん。人のことしかわからんから。違うんだ。その地獄を作っとる本は、お前達の中にあるということを見破っとる。それが僕らになかな届かん。言ってることわかる？

二番目は、「不更悪趣の願」やぞ。浄土に生まれて、生まれ変わろうが死に変わろうが地獄が起こらんようにと誓ってる。そんなもの、浄土に生れたら無量寿のいのちになるんやから、生まれ変わったり死に変わったりせえへんぞ。それを人類が生まれてからずう〜っと自殺と戦争を繰り返してきたのはお前達じゃないかというのを、法蔵菩薩の方が見抜いとる。だから生まれ変わろうが死に変わろうが絶対に自殺と戦争がないようにと誓われている。そうやな。

三番目は、「悉皆金色の願」やぞ。わしゃ成就というところから読んどるのやぞ。悉皆金色の願てわかるか？みんな金になるんやて、金に。浄土に生まれたら。太っとる人はいいぞ。(笑) な、みんな金色になるちゆうわけや。何でかわかるか？ 肌の色の違いで殺し合いをしているからや。だから浄土は、仏さんと同じ色になるちゆうわけや。ほお〜言うて、今頃感心しとったらあかんぞ。(笑) いや、そういうことだ。そして、肌の色の違いだけじゃない。民族の違い、国家の違いで殺し合いをしとると。それを超えろということを見抜いているから、人間の迷いを見抜いているから、そういう本願が立てられてるんやぞ。

四番目は、「無有好醜の願」か。そうや、あの無有好醜の願ちゆうのを本にして、柳宗悦が富山の城端別院で『美の法門』というものを書いて、それが民藝運動の聖典になって日本の、例えばみんなが知っとる版画家では棟方志功とか、陶芸家では河井寛次郎、濱田庄司とか、染織家の芹沢銈介とか、そういう人達が生まれてくるんやぞ。無有好醜の願。浄土に生まれたら、美しいとか醜いとかないというんや、浄土に生まれたら。な。この世ではあるかもしれんぞ、やっぱ(笑)。そういうこと言うて、すぐにマスコミから取り上げられるけど、わしゃ本当のことを言うてんや。建付けがやっぱいい人おろうが。なかにちょっと曲がっとる人もおるわな。(笑)。それでも、浄土というのは、比べるということを超える世界だから。だから比べなくていいということ言っているのやぞ。赤い色は赤い光を放つ。「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」(『阿弥陀経』)とあろうが。あれは浄土の蓮の華の色や。比べる必要がないということ言っているのやぞ。比べる必要がなかったら、美人は美人で120%やし、な、それなりはそれなりで120%や。(笑)

な、問題なかろうが。それを言うとするんやぞ。ということは、人間は比べるということによって
どんだけ傷つけて、どんだけ殺し合いしてきたか。ということが見破られているのやぞ。

そういうことが、長い間勉強をして、そして自分の人生をよく考えて、そしてしてるうちに、
やあぁ～そういうことやったんやと。一生懸命努力して頑張ったら救われる思うてやってきたわ
けさ。法然のところへ行ったらわけよ。あれな、法然のところに行くのも、いいかね、法然は「悲
しきかな 悲しきかな。 いかがせん、いかがせん。ここに予がごときはすでに戒定慧三学の器に
あらず。」と言うわね。つまり、戒定慧というものを保って修行をする。無理だと。私のような者
に合う法門があるかと思うてあちこち訪ねたけど、先生もおらんし、友達もおらんと書いとるわ。
これ何言っているかわかるか？ これな、「自力では救われませんよということを教える人が一人
もいなかった」。そういうことやね。だから法然は25歳の時に比叡山を降りて、醍醐寺とか真言
宗とか東大寺とか、あらゆる人を訪ねた。その中に自力では救われないということを教える人が
一人もいなかった。「もうちょっと勉強しましょう」みたいなことを言うわけや、みんな。それだ
ったら法然の方が上だから、その時にほとんどの人が法然の弟子になった。26歳で「智慧第一
の法然房」と言われました。ところが、今言うように、「悲しきかな 悲しきかな」、あの文章ね。
最後に経蔵に入って、善導大師の「一心専念弥陀名号」と。「一心に念仏を称えなさい」と。「本
願の教えがわかりませんか」と。「本願の教えに依って救われなさい」と。こう言われている文章
を見て、私は泣き崩れたんだと。43歳でした。だから43歳になるまで、日本の仏教界で善導
のように「自力では救われませんよ」と言う人が一人も居なかったということ。

だから、僕はこれまで『大原問答』を何度も読んで来ましたが、あれを見ると表向きには聖道
門と浄土門の戦いなんです。そうやね。しかし、はっきり言うわ。内容を見ると、自力では救わ
れないという立場と自力で救われるという立場の違いです。わかるね。だから法然は、必ず聖道
門と対決する時に、「自力では私は救われませんから。本願に依って救われたのですから」と言う
わけや。そうすると、これね、いいかね、「法然は念仏を安売りして、宗教の安売りをして、庶民
に安売りしている」と、こういう風に噂が流れとった。けどね、親鸞、たぶん法然のことは比叡
山の間ずっと知っていた。だって、あの大原問答があったのは、法然55歳の時。親鸞その時1
5歳でした。まだ出家するころ。だから、その頃から「智慧第一の法然房」と有名だったけれど
も、あの人が「自力無効」ということを提唱して、浄土教を語っているということは親鸞は知っ
ていた。だから、20年も勉強したら、自力で救われないということぐらいわかる。ところが、
それが身に落ちないから、もしかして、あの法然のところに行ったら、この自力無効というこ
とが身に落ちるかもしれない。だから六角堂に百日籠った。ね。そして、「行者宿報設女犯～」と
いうあの夢告を見て、その暁すぐに法然のところに行っている。だから、あれは法然のところに行
くか行かないかに悩んでいた。問題は、自力無効か、自力無効じゃないのかという、そこが身に
落ちるか落ちないかで悩んでいた。全部読んだらそうなってる。法然だってそれで悩んだと書い
てるんだから。

そして、法然のところへ行ったら、いや、一生懸命頑張って覚りがわかるくらいなら、私は早
く比叡山でわかってたでしょうと。ただ念仏して、いのちの底から湧き上がってくる声があるで
しょう。その本願の声に救われていきなさいと。自分で助かるんじゃないで、本願に救われな
さいと。全く逆の方向の仏教を語っている教えに遇って、初めて腹に落ちた。腹に落ちたというの
は、いいか、聞法しとる人達はすぐそういうことを言うけど、腹に落ちたというのは何かと言っ

たら、「迷いの原因がわかった」ということや。そういうことやな。僕が言っているのじゃない、親鸞がそう言っているのやから。迷いの原因は、努力が足りんからやとか、苦しい時に苦しむのは人が悪いからと思うとったけど、そうやなくて、自分の中に徹底的に苦の原因があったと。それがわかった。無明の闇。これが因です。

だからここが大事なのよ。因がわかった。だから、本願の教えが光になったと。「尽十方無碍光」という光になったと、こう言っているのであって、そうやな、僕なにも脚色していないよ。そう言ってる。だから、あるのは本願の教えやから、本願の教えぐらいちゃんと読めよ。毎日。わからんから、読んでも。あれは読んでもわからんのだ。だから親鸞は「成就文」から読んだんだ。四十八の本願はわからん、なかなか。僕は今解説してるけど、これは成就というところから見たらそういう意味があるよと言っているのであって、読んすぐそうわからん。だけど、本願の教えが光になったと。それはなぜなら、無明の闇、原因、苦の原因が見抜かれたからやと。だから光になったんだと。こう言っとる。これ僕が言っているのではない。親鸞がそう言っとるからな。そして、分別を超えた無量の“いのち”こそ、本願こそ私を救う船だと。「**難度海を度する大船**」(「総序」東聖典149頁)。これ、わかるね。いいか?「**難度海を度する大船**」のこの言葉は龍樹。「**無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。**」、これは世親。大乘仏教の二人の言葉をもってきて、自分の信心を表明しとるんやぞ。如来だと言っているんだぞ。

なぜ如来か? 私の迷いの原因を見抜いたからです。だから光になったんだと。そして、成ってみれば、本当の自己は、本願以外にない。だから“いのち”が願う通りに生きていく。いつも言うように、ひまわりは太陽を向くように、“いのち”は悲しい人の方に向く。だから、悲しい人と一緒に生きていく。そして、仏様の“いのち”をいただいたんだから、必ず仏様の世界に帰って行く。そういうふうにな人生が決定した。

いいか、僕ら何でこの世の中、生きにくいかいと、人生が決定していないから。その都度その都度、物価が高いじゃなあ、その(笑)、なあ、まあ生活というもんはそういうもんや。わしも今日帰る時に、これからスーパー寄らなあかん(笑)。なるべく安いものを買わなあかんのや。生活というのはそういうもんや。けど、ちゃんと人生の方向さえ決まれば、金の使い方も、それなりに決まってくるちゅうわけよ。仏教のために、少しでも儉約してやな、仏教のために使おうとか、少しでも儉約して貧しい人に少しでも、震災に遭うた人でもちょっとやらなあかんと。やっぱり、貧しい困っている人にやろうというふうに、迷いの人生の中で光が差して、そして、その人生が浄土に向かって決まってくちゅうわけや。そこに、本願が、大きな船であると。難度海を度する大きな船であると。こういう意味があるんだと。これは、龍樹の言葉です。

そして、無碍光如来。これは、世親の言葉です。ですから親鸞は、自分の信心を表明する『教行信証』の一番最初に信心は如来であると言っとるのやぞ。なぜなら、私の「迷いの因」を見抜いたからだ。そして、光にまでなってくれた。そして、船になって私を渡してくれる。信心が如来だからだと、こう言っとる。それが、親鸞の『大経』に依る信心の表明だということを知っておいてください。いいかね。

そんなふうにな、まあ親鸞偉かろうが。龍樹と世親と言ったら、これは大乘仏教の開祖やぞ。二人とも。それを持って来て真宗の信心を表明するということは、この他力の一心、本願力の一心は大乘仏教を貫くんだと。「親、鸞」と名のつたんだ。そこに『大経』の信心のいきいきとしたはたらきがある。『観経』の信心、二種深信なんて言うと、どうも体験主義に陥っちゃうか

ら、すぐに昔あの先生に会うとかクソとか言う。それで、それしかない。もう、それは体験主義。そうじゃない。今生きてる。今生かされてる。今活き活きと生きてる、この力動性。これを本願として説き、光として説いている。その『大経』の信心の大切さ。それを親鸞は『教行信証』で顕かにしていこうということになっているというふうに思います。少しわかるでしょ。言っていること。何か質問ある？

それで、こういう力動性がなぜ起こるかについては、これはね。こちら側ではわからない。本願のはたらき。だから、本願の三心を訪ねていく。こういうことが「三一問答」の内容になってきます。だから、「三一問答」では、なぜ如来が信心なのかという謎を親鸞が解こうとしているというふうに考えられます。

質疑応答

先生・・・何か質問ある？ どう？

田畑先生・・・質問の時間になりそうです。はい、河野さん。

質問者 1・・・すみません。もう先生のこんな大きなお話を聞いたらですね、私のちまちましたつまらない質問なんか、もうできないような気がして、

先生・・・いやいや質問につまらん質問はない。どうぞどうぞ。

質問者 1・・・あもう、先生にお手紙出したのは、結局ここでみんなの前ではとても上手に話ができないものですから、お出ししたんですけど、

先生・・・あっそうか、手紙くれたのはあんたですか。まっ何人もおるからようわからん。

質問者 1・・・でも、それがその実にちまちました話だもんですから、なんかちょっと言えなくなりました。そしてその、本当の信心なんて私なんかとてもとてもわからなくて、自分の私の今の居場所はどこだろうかっていうのをいつも考えてるんですね。そしたらやっぱし、あの三不信のところにしか居ないし、ここから私は絶対に出てはいないと思います。

それですとね、信心とは何だろうかって日頃の生活を考えたときに、毎日の生活の中でいろんなことを考えて、「ああそうだった」っていう、自分の中から出て来るいろんな思いに対して、「ああほんと、こんなことまた考えてる」っていう、いつもそんな毎日の生活で、そこでその、お念仏していきなさいっていうことを細川先生から私たちはお聞かせいただいているんです。そして先生はですね「ちょこちょこ信心数知れず」ってことをおっしゃったことがありますとね、ちょこちょこ信心というのは、そういう、いつもいつも生活の中でいろんなことを気が付いてお念仏していく生活かなって思ったんですね。

先生、そんなのが信心と言えるもんですかどうか、ちょっとお聞きしたいと思います。

先生…ああ、あのね、みなさんも信心がはっきりしたらいいと思っていると思う。そんなこと待ったら死ぬから（会場：笑）、親鸞聖人が『大経』の信心をどう言うとか、よく勉強してください。そして、法然がなぜ南無阿弥陀仏ひとつでいいと言うたか。念仏ひとつでいいんだと。

それこそ今彼女が言っとるように、私たちの思いというのは「ああでもないこうでもない」と思うもんや。そんな思いを超えて念仏しなさいと。ただ念仏しなさいと。これでいいんだちゅうわけですよ。で、そこにね、今日ちょっと言いましたけど、まあ私の家内も白血病で亡くなる時に「私のようなわからん者でも念仏したら救われるの？」って言われました。「わからん者でも救われる。念仏せい」と。「わからんかったらわからんでいい。そのまま念仏せい」と。なんでかと言ったら、段々段々自我も薄くなってきて、自力も衰えて、そして死ぬ時には「白血病になったのが嫌だと言って」、「それを仏さまのいのちに、南無阿弥陀仏に任せなさい」と、何べんも言うた。そしたら「任せられん」て言うとな、やっぱ。そりゃそうや。任せられんわな。そやけど、死ぬ時、死ぬ二日前やったけど、その時に家内がこう言うた。「今日はよう寝たわあ。ものすごく気持ちがいい。体の痛いのも何ともなくなった。嬉しいわあ」って言って、「私何の病気なん？」って言ったわ。もう呆けとんのやな。けど、呆けとるのは呆けとんのやけど、しかし、そうすると、もう白血病のいのちそのものになつとんのやぞ。任せるもくそも。そして「私何の病気なん？」て言うから、嘘ついたらあかんから、「白血病や」と言ったら、「ふうん、もう治ったん？」って言うた。「治ってないけど、よおう寝たら楽になるからよおう寝たらいいぞ」って言うたら、「ふうん、ありがとう」ってこうしとったわ。もうそれは亡くなる二日前やった。それは任せるも任せんも、いのちそのものがもう白血病のいのちになりきって、そして自分の自我も衰えてきて、もともとあった仏さまの世界の方が立ち上がって来とる。だから、わからん者でも念仏したら仏さまが迎えに来る言うとか。あれは正しい。『観経』は偉いと思う。だから「仏さん迎えに来るから」って言ったら、「ふうん」って笑とったわ。「どうやって来るんや？」と。「バカおまえ、宮崎駿のおまえ、かぐや姫みたいな金の船に乗ってドンチャンドンチャン言うて来るわ」言うたら、「ふふっ」て笑らとったけど（笑）、そんなんなつとったわ。

だから僕は家内に「『観経』の教えはやっぱり素晴らしいと思う。あれは本当のことを説いてる。そのようになっていった。「わかってもわからんでもいいんだ。念仏しなさい」と。「そしたら必ず仏さんの方が迎えに来る」。そらそうや、もともとあった世界が仏さんの世界なんやから。自力の方が衰えて、仏さんの世界になるんだと。だから迎えに来ると。あれは正しいと思う。だから、わかってもわからんでもいい、もう。わかるの待ったら死ぬから。（会場：笑）

それやったら今言ったように、僕も自分の思い言っていないぞ、親鸞こう言ってると言っとるだけやぞ。だから親鸞がどう言ってるかをよおく学んで、「あっ、私たちのそういう、わあ、この辺が違うんやなあ」ちゅうことを知らしてもらうしかないね。そして私は最後には、わからんかったと、わからんかったんだと言って頭を下げてしまえばいいんだ。そこに法蔵菩薩が立ち上がってくるんですと、親鸞が言うんだ。『大経』では二十願の機。機の深信の十九願ではない、二十願の機。自分ではわからない自力が、深～い自力がある。仏教がわかったと思うて、超えたと思うとか超えられない、そこに法蔵菩薩が身を捨てた意味があるんだと言って、法蔵菩薩の力動性によっていくところだから、わからんでいいんです。信心をわかろうとするからしんどなっ

てくる。

質問者1・『観経』はやっぱり死ぬのを待つというか、死ぬ時しかもうわかんないっていうことですね、先生。

先生・『観経』はそう書いとるな。だから『観経』は命終わるときに救われると書いとるから、一応「方便」だと。できたら今わかってほしいけど、それはもう万に一人もおらんと。わかったとしても自力があるんだから、わからない人と同じところに立つのよ親鸞は、最後には。だだの爺さんになるのよ。そして、仏さまはありがたいと言うて、仰いでゆく人になるんだと思います。答えになってないけどごめんね。念仏ひとつでいいんじゃないですか。

田畑先生・えっと、塚崎さん、何か質問を用意しとったけど、何か。

先生・どうぞどうぞ。

質問者2・あのう、先生の『教行信証の世界』（『親鸞の主著『教行信証』の世界』東本願寺出版）の本をです、ちょっと最初の方から読み返してたんですけど、その中に、「阿弥陀如来の本願力によって仏に成るのだから、仏に成ることは難しくはない。しかし真実の信心を獲ることは衆生の最大事件だから、それが実に難しい」（48頁）

（「しかるに常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂実（まこと）に獲ること難し。何をもつてのゆえに。いまし如来の加威力（かいらき）に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり。たまたま浄信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。ここをもつて極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。」

東聖典211頁～、西211～、島12-55～）

という文章があったんですけど、仏に成るのは難しくはないけど、信心を獲ることが難しいと。信心イコール本願に帰すことが実に難しいとおっしゃっておられる、この辺をちょっと。

先生・その通りです。

僕らは迷いの因とか、無明の闇とか、迷っている原因なんて考えてもわからん。それは、親鸞からすれば、今言ったように20年の求道を経てね、そして、このどうしても身に落ちんと。理屈ではわかると。けど、身に落ちんのやと言って、迷って迷って百日六角堂に籠ってね、最後に「自力無効」ということを表立って表明しながら仏教を語っている仏教者は法然しかいなかった。だから、もしかしてあの人の所に行くと「自力無効」ということが腹に落ちるかもしれんと思うて、たぶん行ったんでしょね。何を言ったかわかりませんね。けど、法然は「自分で助かると思うてやってきたでしょうが、そんな仏教は助かった人は一人もいません。あなた、いのちの底から本願が呼びかけているのがわかりませんか」と。

少なくとも僕らは目が外に向いて、仏さまを外に見て、仏教を外で外で捕えようとする。いつもそうや。そういう意味では『観経』は西の方におると。西の方の仏さんが救うてくれると、こう思うて一生懸命求めていく。ところが今の言い方はこっち側を言うとする。法然の。これどう

も今まで見てた方向と全く逆の方向をこの人が言ってると思うたでしょうね。そして、「本願の声が聞こえませんか」と。それを「本願に救われなさい」と。ほう、ともかく「救われる」という言葉も珍しい。俺は「助かろう」と頑張ってきたと。ところが「救われる」と言っると。しかも「本願はいのちの底からあなたを支えとるじゃないか」と言ってる。どうも全然違うことを言うるということを聞いて、初めて「ああ～、この身はなんぼわかったわからん言うてみても煩惱の身だ」と。確かにこの身こそが迷いの元だと。これが本当かどうか、あの人はしつこいやからね、本当かどうか俺は確かめに行く言うて法然の所に百日通うた。そしてずうっと講義聞きながら「ああそういうことなんや、そういうことなんや」ということを全部ここに凝集する教えとして聞き取った。そこに親鸞のやっぱり偉いところがあるというふうに思います。

というふうに、本願に目覚めるということが私たちの最大の課題であって、そのことが実に難しい。けども、目覚めてしまえば本願力こそ私を生かしている大きなはたらきなんだと。今まで自我の自分が本当だと思うとったけど、そんなものはいつも物を外に見て、そして利害、勝つか負けるかそういうことばかり言うている。そうじゃなくて、全部引き受けて生かしてくださっている無量のいのちがある。このいのちこそ私の本来の自己であると。こう名乗った。そこが決まれば、もう仏に成るということは決定されている。ここで決定している。だからいのち終われば必ず仏に成るという意味で「正定聚」と。今覚りを悟ったというわけにいかんのだと。だけど必ず仏に成る。ということが決まったんだと。こういう意味だと思います。いいですかね。

質問者2・・要は、「身に落ちる」という先生がおっしゃられた表現ですね、本願が身に落ちるとい
うか、あの、

先生・・そうです。親鸞はそうだったと思います。

質問者2・・ありがとうございました。

先生・・だからそこはね、なかなか難しいし、親鸞のようにわかるわけにいかない。わからないでいいと思う。「ただ念仏しなさい」、「一心専念弥陀名号」、「**一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近（くごん）を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに。**」（東聖典217頁、西220～、島12-61）

念仏だけは人間の言葉ではないんだと言ってるんです。仏さんがくれた言葉なんやから。念仏だけしか信じる言葉はないと、こう言ってるわけです。それで十分なんです。と思います。

他に何かありますか？いい今日は？

今日は『大経』の信心というものはどういうものかということをお願いした。これはしかし僕の意見じゃないぞ、親鸞が言っるとる通り言った。世親が言っるとる通り言っただけであって、だから、ひょっとしたら『教行信証』を読むときには、今のような信心、今のような如来観、そういうものを背景にして親鸞が、

質問者3・・（途中で）質問があるんですけど。

先生…ああどうぞ。

質問者3…その件じゃなしですけど、気になってんですけど、先生が「書いてる通り、書いてる通り」と言うんですけど、私は書いてる通り言ったら、もうその人は立派じゃないよね。先生は腑に落ちてね、もうしっかり身に付いてるからね、説得力があるんだなっていうことを、

先生…いやいや、そんなことはないんだ。それはなあ、ちょっと溝口さん買い被りちゅうもんや。

質問者3…そうですか。でもそうじゃないと、教えるとか難しいんじゃないかなと思うんですけど。

先生…いや、僕だっけずっと聞法しとんのや。で、この間ここでお話した時に、あの『愚禿鈔』のところを言ったやん。そしたらその辺で質問してきたやん。曾我さんは機の深信から法の深信を開いて、法の深信の中にまた機を収めると、こう言っとるんだと言ったら、そんなん答えにならんと。どういうことやとこう訊かれるから、そんな風に詰めてこられると、ええっと思って、そんであんときはあれやな、仏教で、誠に申し訳ないけど神がかりになって、あれは善導の三願転入やと言ったわけよ。あれよう言うたと思うて、帰ってわしゃ感動して寝れなんだ。(笑)自分で感動して。だけどどう読んでもそうなっとうが。ああそれが善導大師の「彰隠密」なんやということがわかってきた。だから僕だっけずっと一緒にわかっていっているだけで何も、

質問者3…だからそれが頂けてるからね、と私は思うんですけど。

先生…いや、それは溝口さんが勝手に思っただけじゃ。

質問者3…そうなんですか。

先生…わしゃもうわからんことが一杯あるんや。

質問者3…わからんことがいっぱいありながらわかっているという(笑)。

先生…いやいや、親鸞が言うた通り言うてる。要するにそういうこと。親鸞が言うた通りをちゃんと勉強すれば本当のことがわかってくる。

質問者3…そうでしょう。そうじゃないと、言い方、

先生…だから本当のことがわかってくると嬉しくなってくる。そして本当のことがわかってくると元気になる。本当のことがわかってくると謙虚になる。

質問者3・・・それを先生は身に付けてるなあとは思うんですけど。(会場：笑) すいません、いらんこと言いましたが。

田畑先生・・・はい。

質問者4・・・あのう、せっかくマイクが来たとき、あと5分あるし質問していいですか先生。

田畑先生・・・どうぞどうぞ。

質問者4・・・あのう、前回言われたんですけど、まあ今日も先生の説明を聞いたら聞けば聞くほどわからんようになって、私と同じような人もいっぱいいると思うんですけど、あのう『大経』の教えで、簡単に言うたら先生あのう、法蔵菩薩の心は勝行段(しょうぎょうだん)(東聖典26頁14行目～27頁14行目、無量寿経科文番号31、東聖典978頁下段)に書いてると。で、勝行段をよく読みなさいと前回言われたんですけど、そうするとその『大経』の心を、法蔵が私のいのちとして入って来るために、私が頷いて、頂いて、「少欲知足」「和顔愛語」「恭敬三宝」だけを、わかりやすく言うたら、それだけを、「そうなりたい」「そう生きて行くぞ」と思い込んで生きて行ったら、それは『大経』の心なんですか？

先生・・・まあ思い込んで生きて行ったら、思い込まんよりもましや。(会場：笑) そらそうや、教えちゅうのはそういうもんや。わかっててもわからんでも守っていく。まずそれが大事やな。

だからそういう意味では、この世でやっぱりできるだけ華美にしないように、できるだけまあ、貧しくは今難しいなあ、うん、けども少なくとも金に囚われていないよというふうに生きて行かなあかんわ。やっぱあ。やっぱあなあ、なんとなくケチなのはあかんのや、やっぱあ。(会場：笑) 出す時はちゃんと出さんとあかんのや。(会場：笑) それもお前あれやぞ、しょうもない酒飲むときに出すと損しちゃうぞ。(会場：笑) そうやなくて仏法のためにやっぱり使う時は使わなあかんと。そういうのが自分の人生をまた決めていくことやから、教えちゅうのは守った方が楽や。

この間、小樽に行って小樽で若い人と飲んどって、わしゃ酒飲めんから帰るって帰って寝た。若い奴に昨日どうやったんや、どっか行ったかって言うたら、いや先生ね、昨日わしあちこち探したんやけどなかったんやと。そしてふっと「三毒五悪段」を思い出して、酒飲んだらろくなことねえと、こう書いてるからわしゃ帰って寝たんやと。やっぱり先生『大経』偉いわ。寝たら今日楽なんや。(会場：笑) そうそう、教えちゅうのは、教えをちゃんと守ればやっぱり楽なんや。そして身が整っていくんや。それが大事なんや。だから西藤さんがそう言うんやったら、そら思い込んででもいいから、教えをちゃんと生きて行く。これ大事やと思うぞ。

質問者4・・・いや、もういいです。(会場：笑)

田畑先生・・・はい、ありがとうございます。

質問者4・・・えっと、ひとつ質問させてください。あの、我々を悩ませ苦しませるその無明の闇の

原因は自力であり自我であると、これをもう少しわかりやすく言えば、自分の思い通りにしたいとか、自分の思い通りに生きたいということですかね？

先生..そうです。僕はいつも言うように、生まれた時は自我が無かった。なっ。だから三歳ぐらいまでは花とか犬とか猫とか同じいのちを生きとった。そして私も他人も無いから、その時は一如の世界やから、仏さまの世界に生かされとったと言ってもいい。そうやね。ところが人間だけは言葉によって四歳ぐらいになると自我が生まれてくる。そうやね。そして自我が生まれてくると、今まで仏さまの一如の世界やった世界を私の世界に変えてしまう。私を中心にする世界に変えてしまう。そして、他のいのちは何にも比べたりしてないのに人間だけが「ああでもないこうでもない」言うて比べて、そして苦しんでいく。

お釈迦様は当たり前やけど、覚っている人やから、「苦しみの元はその辺にあんのやけどなあ」と人間に言うてもわからへん。なんぼ言うてもわからへん。けど、人間が人間になった時から私を中心にと、仏さまの世界を、少なくとも仏さまの世界であったものを私を中心にする世界に変えてしめて、そして自分の思いが届くか届かんか、そればあっさり生きていくようになって苦しんでいったんのやから、その辺に迷いの原因があるよということはお釈迦様はちゃんと見抜いとる。

だから一生懸命努力して頑張って、努力しなさいと。ね。人間は人間になった時に仏様の世界に背いたんやから、その上でいくら努力を積み重ねても嘘になるのに決まってるから、それを見えてるからお釈迦様は『観経』で「頑張んなさい」と。「絶対行き詰まるから」、これは言わんよ、お釈迦様だから、方便だから。(会場：笑)ね、お釈迦様はそんなこと言わんよ、先のことは。一生懸命頑張ってやんなさいと。それは真面目にやれば行き詰まるに決まっとる。真面目でないから生きとるんやから。(会場：笑)なっ。(笑)。

質問者4..ありがとうございます。

先生..だからそういうことよ。おっしゃっている通りやと思うよ。それがわからんのやあ。いくら言われても。まあ死ぬ時わかるから大丈夫。(会場：笑)

田畑先生..はい、ありがとうございました。

先生..アハハ！（笑）

田畑先生..一応質問の時間を終わりたいと思います。最後に恩徳讃。

(恩徳讃、終了)

【テーブル起こし】：山本泰久さん、住職

【添削】：住職